

平成 30 年 5 月 30 日現在

機関番号：14501

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2016～2017

課題番号：16H06966

研究課題名(和文) 諸藩における藩校の成立・展開と藩儒の役割 鳥取藩の事例を中心として

研究課題名(英文) The Formation and Development of Domain Schools and the Role of Confucian Scholars: With a Focus on Tottori Domain

研究代表者

浅井 雅 (ASAI, Miyabi)

神戸大学・国際文化学研究科・協力研究員

研究者番号：80782010

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円

研究成果の概要(和文)： 諸藩における藩校の実態を明らかにすることは、研究の出発点である。しかし、諸藩における個々の藩校の実態について、まだまだ実証的に研究が行われているとは言い難い。これに対して本研究は、上のような研究を進展させるため、藩校関係史料の所在のデータベース化に見通しを立て、一方で鳥取藩・加賀藩に関する実証研究を、各藩に登用された儒者の私塾(家塾)に目を配りつつ行った。

研究成果の概要(英文)： This research takes as its goal the empirical clarification of the actual conditions of domain schools. To this aim, it has accomplished the following:

1. the creation of a plan of action for a database on historical documents related to domain schools.
2. the empirical clarification of domain schools including the investigation of Confucian private schools in Tottori and Kaga domains.

研究分野：近世史、教育思想史

キーワード：藩校史 藩儒 日本儒学 日本思想史 日本教育史 近世日本史

1. 研究開始当初の背景

本研究は、私の博士論文「近世藩儒の研究 18世紀龍野藩の事例を中心として」から導きだされたテーマである。

私の博士論文では、近世日本の身分制における藩儒の社会的存在形態や地域におけるその社会的・文化的役割を、18世紀を中心として明らかにしたが、特に最終章では、それ以前の藩儒の活動が藩の教学政策にいかなる影響を与えたか、龍野藩における藩校の成立を検討した。先行研究においても、石川謙『日本学校史の研究』(日本図書センター、1977年)などによって、藩校設立以前にも講堂型、家塾型など藩校の原型があることが指摘されていたが、それについてあまり検討されることがなかった。むしろ、藩校の建物や規則ができた年を基準とするような一覧表が多く作られてきた。藩校の建物や規則ができた藩校の「成立」については確かに画期であり、ひとつのメルクマールとはなるが、それを絶対視すべきでない。

また、その他にも、藩校については教育史の分野における先行研究が多く存在するものの、そのほとんどが明治期にまとめられた二次資料である『日本教育史資料』(文部省編、1890~92年)に依拠している。『日本教育史資料』については、そこに収められている資料が必ずしも信用に足るものではないため、これを用いることには慎重でなくてはならないにもかかわらず、そのことを自覚して分析している研究は少ない。

そこで、私の博士論文最終章では、藩校設立以前と以後の両方の関係(連続面・断絶面)を視野に、龍野藩を中心として実証研究を進めた。従来の研究では、龍野藩校は江戸藩邸内には文化2(1805)年、国許龍野には天保5(1834)年に開校したとされる。

しかしながら、博士論文最終章の実証研究によると、龍野藩では天明7(1787)年以降、幕府による寛政改革を受けて、文武奨励とそれに伴う「褒賞」「褒美」が行われるようになる。このことに始まり、藩儒股野家の私塾が、その後かなり長い期間「準藩校」の役割を果たしていたのである。その後、文武が一所に行われるのは、19世紀に入ってからとなった。譜代の龍野藩では、藩主が幕府の要職にあり、江戸詰が多かったため、まず文化2(1805)年に江戸藩邸に藩校が成立した。しかし、江戸藩邸内の藩校については、文化11(1814)年には財政難のため「御省略」が検討され、以後、藩校としての体裁はなさなかったようである。

国許において、本格的に開校するのは天保5(1834)年であった。しかし、この国許藩校の開校に際しても資金調達が問題となっている。その後、藩校は町人からの寸志銀によって何とか維持されていた。そして、次第に試験制度や寮制度、9つの学科が整えられ、教授陣についても、若手の登用が図られるとともに、役割が細分化されていった。一方で、

龍野藩では藩校設立後も藩儒の私塾が維持され、両者が併存した。このため、慶応3(1867)年の時点においては、だれはだれの門人と特定の師弟関係を問題としないようにするという提案がなされている。このことは、藩儒の私塾が「準藩校」として機能していた時期よりも藩校が組織化され、公的な性格が強まり、私的な門人関係を持ち込まない体制となったことを示している。これ以前の安政3(1856)年には、元禄頃までさかのぼることのできる象徴的な御前講釈「三八講釈」が藩校へと吸収され、龍野藩において、学館が教育の主体となったことが確認できた。

このように、藩校というのは、実質的には、それ以前の形態(御前講釈、家塾、積奠積菜の混合)の延長だけである。石川謙『日本学校史の研究』のようなモデル化された枠組みは先行研究として参考にはなるが、実際には、藩校への移行の過程は未分化な部分が多く、石川のモデルにはきっちりおさまるわけもないので、藩校以前の各藩ごとの活動にも目を向け、この博士論文最終章における龍野藩の事例のように実証的に検討すべきと結論付けられた。

2. 研究の目的

本研究では、藩校の成立・展開と藩儒の役割の連関について実証研究を行っていくため、まず藩校の史料とその中の登場人物を明らかにできる藩士の履歴がどこに残されているかのデータベースを構築する準備を行った。同時に、注目すべき藩の実態を明らかにしようとした。この中で特に明らかにしようと考えたのは、19世紀に多くが設立される藩校の成立過程と藩儒の関係である。

具体的にはまず、藩校設立前後で藩儒の役割がどう変わるのかを実証的に明らかにしようとした。藩儒の役割を考えるうえで、藩校の設立は大きな画期であったはずであり、藩校設立前後における藩儒の役割の変化や藩儒間の役割分担の変化は興味深い研究課題である。しかし、先述の博士論文において検討した龍野藩においては、藩校設立後の藩儒の役割は、制度上の役割分担のみしか捉えられず、その実態は明らかにできなかった。そこで、本研究においては、藩校成立以後についての分析を藩校日記等が残っている諸藩の事例として鳥取藩等を事例としながら充実させようとした。

また、藩校設立の諸藩の動向と幕府の動向との相互関係についても検討しようとした。諸藩における儒者登用の動向が、幕府の徳川家康による林羅山の登用や綱吉の好學に影響を受けていることは明らかだが、逆に、宝暦・天明期の諸藩における教学政策の展開が、幕府の寛政異学の禁の前提となっているという側面もある。龍野藩の事例に即していえば、むしろ寛政異学の禁が藩の教学政策の展開に影響を与えていて、そういった相互関係

が全体としてどうなっていたかを今後広く明らかにしていく必要がある。

3. 研究の方法

(1)【資料・情報の収集】

鳥取県立博物館および金沢市立玉川図書館の所蔵資料を調査・収集した。

鳥取藩では、宝暦7(1757)年という比較的早い時期に藩校が設立されているうえに、明和5(1768)年から嘉永4(1851)年の「学館御日記」14冊が残っていて、このほかにも豊富な藩政史料が残されている。藩校設立後の実態については「学館御日記」により検討した。藩校設立以前の状況については「学館御日記」からは明らかにならないため、家老や御用人の日記についても駆使した。家老の日記については承応4(1655)年から、御用人の日記については寛文元(1661)年から残されている。鳥取藩に残された史料については、扱わねばならない史料が膨大すぎて、これまで藩校研究に利用されることは無かったが、本研究においてはこれを利用し研究を行った。

一方、加賀藩校明倫堂は寛政4(1792)年に開校している。明倫堂については、『日本教育史資料』に依拠したさまざまな研究が行われている。しかし、そのほとんどが教育史を中心とする成果のため、教育制度の解明等が主で、その担い手である藩校の教官や藩儒と藩校の関係や、藩校成立以前の教育の実態については明らかにされていない。加賀藩の藩校関係史料については、日記としてはほとんど残っておらず、「覚」や「留書」の形式が多いため、一つずつの確認に時間を要した。

上記の藩校関係史料を解読するための藩士の履歴をも入手する必要があった。鳥取藩については「藩士家譜」、加賀藩については「先祖由緒并一類附帳」を収集した。

上記とは別に、諸藩における藩校設立の動向を概観した上で、藩校関係史料と藩士の履歴がどこに残されているか、各館のホームページや目録によって情報収集を行い、データベース化に努めた。しかしながら、この作業は、2年ではすべて完了しないことは、申請時から記載済みであったので、インターネットや目録において情報収集できるものについては、2年で一通りの目途がつく程度に行った。将来的には、現物の確認も含めて網羅的にデータベース化を行い、これを公開して他の研究者などの社会的利用に供しようと考えている。

(2)【整理・翻刻および分析・考察】

分析にあたっては、藩校設立以前の藩儒や藩儒の私塾の状況、また御前講釈と藩校との関係に注目して分析を行った。

また、これまであまり注目されてこなかった国許の藩校と江戸藩邸内の学校との関係を考慮しようとしたが、両藩とも江戸藩邸の藩校については史料が見当たらなかった。

さらに、幕府の教学政策、とくに寛政異学の禁との連関について考察を行い、藩の規模や幕府との関係性によっていかなる結果になるか検討を行おうとした。博士論文で取り組んだ龍野藩の事例においては、龍野藩が大坂に近く、山陽道沿いに位置し、譜代(願譜代)藩であること、藩儒が参勤交代に従い江戸にも国許にも滞在することなどの特徴が上げられる。この、大都市に近く街道沿いに位置した譜代の比較的小さい5万石余の龍野藩と、鳥取藩や加賀藩など外様の大藩とでは、事情が大きく異なることが予想されたため、この点にも注目した。

4. 研究成果

本研究の成果は以下の5点にある。

(1)先にも述べたように、藩校についての研究は教育史において多く蓄積されているものの、そのほとんどが明治期にまとめられた二次資料である『日本教育史資料』に依拠しており、必ずしも実証的な研究が行われているとは言い難い。『日本教育史資料』は、文部省が明治10年代から20年代にかけて、府県学務課や旧藩関係者に協力を要請し、聞き書き等の調査を行った史料叢書であり、そこに収められている資料が必ずしも信用に足るものではない上、地域によって収集量にばらつきがあるため、これを用いることには慎重でなくてはならないにもかかわらず、これまでそのことを自覚して分析している研究は少ないのである。そこで、本研究では、儒者の日記や藩政・幕政関係の史料などの一次史料を積極的に用いて、藩校の実態を明らかにした。

(2)藩校についての研究は多く存在するものの、藩校設立以前の藩儒の活動が藩の教学政策にいかなる影響を与えたか、諸藩における藩校の成立について、上のような課題を視野に入れて検討した先行研究は少ない。むしろ、藩校の建物や規則ができた年を基準とするような一覧表が多く作られて、その「成立」の画期や「成立」後に着目した研究について多くある。また、従来の教育史の分野における研究においては、近代との連続性の中で藩校を捉えることが多く、藩校設立以前の藩儒の活動にはほとんど注目されてこなかった。これに対して、本研究は藩校設立の前と後の両方を視野に入れ、研究を行った。

(3)本研究は、今後も継続的に一次史料による実証研究により、藩校設立前後を視野に入れた研究を行うため、研究の柱の一つとして、諸藩の藩校関係史料やその中に登場する人

物の特定をするための史料としての藩士の履歴（由緒帳、侍帳等）がどこに残されているか、情報収集を行うことを当初より計画していた。この研究については、申請の段階から2年ではとても終わらないことは記載済みであり、この研究については結局完成には至っていない。しかし、今後の研究においてこれを確定して、どこかのタイミングで発表したい。

(4)もう一つの柱である鳥取藩と加賀藩の教学政策の実態を明らかにする実証研究の結果、両藩の最初の藩儒が登用された時期や藩校設立以前の藩儒、両藩における藩校設立以前の文武奨励の実態や藩校の学風、藩校と藩儒の私塾あるいは城内の月次講釈との関係、その中で藩儒が果たした役割等を明らかにすることができた。これにより、藩校への移行の過程はやはり未分化な部分が多いということが結論付けられた。

この研究については2018年1月に口頭発表を行い、3月に論文化した。

(5)また、上のように口頭発表を行い、論文化したことで、これまでの課題・関心のほかにも新たな問題にも気づくことができた。

国許藩校と江戸藩邸内の学校の連関については、史料が見当たらず分析できなかった。鳥取藩校に関して、天保14(1843)年に八代洲河岸藩邸内に創設され、たびたび焼失して、文久元(1861)年になって、学問所内に講武場ができ、文武が一所に行われるようになったことを知るのみである。諸藩の江戸藩邸内の学校の動向も含めて、幕府の教学政策と諸藩の教学政策の連関も今後の課題である。

今回検討した鳥取・加賀の両藩において、最初の儒者と京都の関係が注目された。加賀藩においては、京都の儒者である木下順庵が召出されたほか、鳥取藩においても、最初の儒者辻晩庵は京都古義堂の伊藤仁齋に学んでいた。以前検討した龍野藩においても、最初に藩儒の家を形成する藤江家と2番目の股野家の初代は古義堂に学んでおり、西国の藩儒と京都の関係を今後検討する必要がある。

藩儒だけでなく藩校創立者における修学内容についても、今後改めて検討を必要とする。本研究においては、諸藩に「儒者」という役職で召し抱えられた厳密な意味での儒者を捉え、儒学の両藩への浸透度合いなど数量の面で客観的な資料を提示することはできたが、鳥取藩の儒者である箕浦世亮や加賀の好学藩士などを検討するにつけ、藩校創立者における学習内容については、好学藩士まで含めないと厳密に検討できないことが判明した。

今後も上のような気づきを元に、各藩の教学政策の藩校へ移行過程を探っていきたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計1件)

浅井 雅、諸藩における藩校の成立と藩儒の役割 - 鳥取藩と加賀藩を主な事例として -、日本文化論年報、査読無、第21号、2018、pp.13-27

[学会発表](計2件)

浅井 雅、諸藩における藩校の成立と藩儒の役割 - 鳥取藩と加賀藩を主な事例として -、関西大学セロリの会、2018.1.30、関西大学文学部(大阪府吹田市)

浅井 雅、熊澤蕃山と閑谷学校、熊澤蕃山先生を偲ぶ会講演(招待講演)、2017.8.26、備前市正楽寺(岡山県)

[図書](計2件)

大石学・吉峯真太郎・杉本寛郎・野村玄・楳田有希子・佐藤麻里・福留真紀・吉成香澄・保垣孝幸・浅井 雅・木村 涼・松本剣志郎・池田美美・金井貴司・安田寛子・Le Roux Brendan・鈴木崇資・太田和子・神谷大介・落合功・桐生海正・門松秀樹・花岡敬太郎・岩間一樹・鈴木一史、清水書院、悪の歴史 日本編(下)、2017、507(142-160)

木全清博・宮坂朋幸・馬場義弘・鈴木敦史・久保田重幸・坂尾昭彦・浅井 雅・八耳文之・池田 宏・光橋正人・渡 晋一・板橋孝幸、サンライズ出版、近代滋賀の教育人物史、2018、214(79-84 および 91-96)

6. 研究組織

(1)研究代表者

浅井 雅(ASAI, Miyabi)
神戸大学大学院 国際文化学研究所・
国際文化学研究推進センター・
研究員(協力研究員)
研究者番号: 80782010